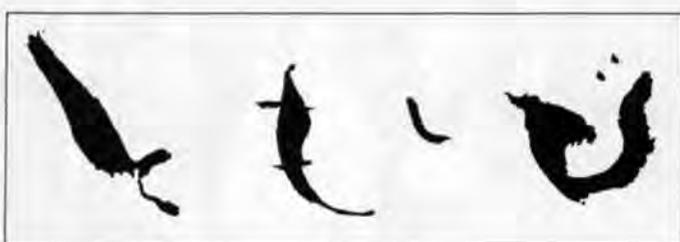


大学婦人協会東京支部

1996.3
第19号

●国際会議と私たち

●「高等教育と女性」シリーズ② 高野フミさん

国際会議と私たち

東京支部長 松沢美仁子

一九九五年は、右往左往している間に過ぎてしまった。年明け早々の震災。三月、地下鉄サリン事件。新聞テレビが、オウム関連、戦後五十年、世界女性会議と忙しく報道している間、私たち大学婦人協会東京支部は、本部他支部と共に、エネルギー、時間、能力をフル稼働して、第二十五回IFUW国際会議に関わった。

肌の色、言葉、習慣の異なる八百名を超える女性が、五十二カ国から横浜に集い、八月の暑い最中八日間会議を開いた。その具体的な意味と重さは、会議が実際に近づき、開催され、終了し、各国から「素晴らしい、大成功だった」と賞讃の言葉が送られてくるようになって初めて、ずっしりと実感されてきた。それまでは、ひたすら空港の迎え、宿泊、登録、会議運営、日本の夕べ、財務、その他諸々に関わりながら、はあはあと走り続けていた。

第二十五回IFUW国際会議では「女性の未来は世界の未来―生存と進歩のための教育」をテーマに、女性と女兒の地位、教育、平等等の問

題を語りあった。会議そのものには舞台裏の仕事のため出席出来ない委員が多かった。しかし、LACに多くの人が関わることによって、ひとりひとりに次のような点が強く認識された。

一、テーマである女性全体の問題

二、日本女性の特性（にこやかです）

一、会員それぞれの隠れていた才能
そして、会員が疲れを忘れるほどの得難い体験を味わった。

眼をつぶると、走馬燈のようにいろいろな場面が浮かんでくる。どの場面でもおなじみの会員が忙しく働いている。シャトルバス、受け付け、万国旗、会議場、ステージ、見学会など、あの忘れ難い会議の写真をパノラマのように並べて、それを見れば会議の様子が一目瞭然にわかる、そんな写真集を東京支部にも残してはという提案があつて、ともしびが係で作成する運びとなつた。

会長、LAC委員長、事務局長、各委員長等のリーダーの方々を先頭に、絶えずIFUW本部と連絡を取りあつて三年に亘って準備が進められた。これほど大規模な会議を女性だけで、しかも会議運営に関して素人の集団が、成功させるとは思わな

かつたという外野の声があつたそう。正直なところ、内野の私たちも、適切な情報を求めて駆け廻り、綱渡りの気分になつたことも結構あつた。しかし、お互いよく頑張つたと思う。東京支部の寄付によるカラフルな資料袋にみな喜びの声をあげた。

LAC委員長を通して寄せられた海外からの参加者の報告書の一部を皆様に紹介したい。

「最後になつたが、この会議を大成功に導くために、JAUW会員が行つた素晴らしい活動のことを述べたい。専門者会議も本会議も全体会議も時計仕掛けの正確さで進み（日本の技術だ！）その脇で即興劇が演じられていた。激しやすいご婦人方（あらゆる肌の色、姿、大きさの八百人強の）が、ほんのちよつとしたことで痾癩を起こしているのだ！鍵、お金、財布、宝石、カメラそれにパスポートまでがなくなつたり出てきたりしていた。この全部及びそれ以上のことが、自分の仕事に専念しているJAUWのヴォランティアの会員によって、ちつとも変わらぬ気軽さと落ち着きと平静さで捌かれ、彼女たちを慌てさせることは何もなかつた！JAUWサヨナラ／アリガトウグジャリマスタ。（ごさいました？）」

思い出

〔1995年8月18日～25日
於 横浜国際平和会議場〕



成田出迎えロビーにて



開会式に皇后陛下をお迎えして



登録風景



国連難民高等弁務官 緒方貞子氏



土井たか子氏を囲んで



国際会議の



パネルディスカッション



本会議



交歓風景



平和学研究奨学金贈呈



バザー



日本の夕べ 踊りの輪



宿舎受付にて



日本の夕べ 東京支部出演 七五三風景

『見学・講座』

国連アジア極東犯罪防止研修所訪問

六月に検事佐々木知子氏の講演を拝聴し、第二弾として氏の勤務されている府中の通称「アジ研」の訪問が九月十日に実現した。

国外研修員十九名及び国内研修員十一名、合計三十名の検事、判事、警視等が、約三カ月間起居を共にし各国の司法の違い等勉強する国連の公的機関とのこと。場所は府中刑務所の丁度向かい側に位置している。

当日は午前中に行われた二つのセッションを傍聴した。バングラデシユの四十七歳の治安判事ラーマン氏とブータンの三十五歳の警視ドージ氏の各々一時間ずつの英語による自国の司法組織についてのスピーチ、及び質疑応答であった。各人の席の前に小さな国旗、ブースには同時通訳、我々はイヤホンをつけての傍聴という次第、ミニ国連傍聴という雰囲気です。緊張気味であった。

ラーマン氏の「人間によって行われる刑事司法運営は、それを任せられる人間次第である」という言葉が、情報報告等が及びる国の悩みを表している印象的であった。お茶を頂きながら各国の方々と歓談し、楽しい時をもち有意義だった。(藤谷文子)

東海村原子力施設の見学

九月二十七日、茨城県東海村の日本原子力研究所と動力炉・核燃料開発事業団の見学会が行われた。朝七時半に東京駅をバスで出発した一行は、十時前に原研に到着。研究所の概要説明を受けた後、我が国最初の原子炉JRR-1もある研究用原子炉施設と安全研究施設及び廃棄物処理施設を見学した。

原研内の阿漕ヶ浦クラブで美味しい昼食をいただき、午後は隣接する動燃へバスで移動。展示館「アトムワールド」で事業所の概要説明を聞いた後、使用済核燃料の再処理工場と高レベル廃棄物を処理するガラス固化技術開発施設を見学した。

私の最大の関心事は、施設内の作業員や周辺環境への安全」ということとであったが、今回の見学会で、施設の構造や設備などに厳重な安全設計が施されており、運転に際してもきめ細かな安全管理が実施されており、また放射性廃棄物もガラス固化体などにして、安全に処理されていることがよく理解できた。

帰路には那珂湊港の魚市場で、新鮮な海産物を求め、九時に東京駅へ無事帰着。皆急いで家路についた。(藤枝史子)

寛永寺拝観とお話(第二回)

講師 寛永寺執事 浦井正明氏
昨秋、浦井氏の興味深い講話に感動し、再度お話を聴く機会を願っていた。

そこで、十月十八日、氏が長年研究を重ねてこられた「吉宗」が、折しもNHKの大河ドラマになっていることでもあり、吉宗像にスポットを当てて講演をお願いした。

徳川家の詳しい系図と吉宗関係の年表を資料とし、「どのような経緯で吉宗が將軍になったのか」について、五代綱吉と六代家宣の関係まで遡り、徳川御三家に加え月光院の動き等、複雑なかけ引きを伺った。

吉宗のもとで、享保の改革が行われ、行政組織、官僚制度、法令が整備された。上げ米の制、足高の制、町火消、株仲間、そして目安箱等注目すべき政策が多い。それに加え学問、海外文化の導入にも力を入れた。それだけに逸話の数も家康に次いで多く残っているとのこと。

流れるような話に耳を傾け、懸命にメモをとったアツという間の二時間半だった。ご多忙にもかかわらず二度にわたってご講演下さった浦井氏に心より感謝し、秋の気配を感じる上野の森を後にした。(中山律子)

『国内奨学金贈呈式』

社会福祉委員長 青木満里子

奨学金贈呈はJAUWの主な事業の一つである。今年度は十二月十六日、青山に新しくオープンしたウィメンズプラザで贈呈式が行われた。

今回の受賞者は、国内奨学金、社会福祉、東京支部の選考委員会によって選ばれた、一般学生十七名と身体に障害を持つ学生五名であった。当日はその中の十六名と関係者、会員を交えて約四十名の出席があった。

青木怜子会長より各受賞者に奨学金が手渡された後、JAUWの活動、IFUWの国際的連帯の事業について述べられた。

お茶の時間に入り、奨学生がそれぞれの学習、研究の内容、抱負について活発に話された。特に車椅子の生活をされて児童福祉を志す方、殆ど視力を失った方が、英語を更に勉強するため留学も考えておられるという、積極的な態度に感動した。なお、障害があっても周囲の温かな協力によって、その能力を十分発揮させられることを改めて理解した。

今回は不馴れな会場であったにもかかわらず、気持ちよく協力して会を盛り上げてくださったご出席の皆さまへお礼を申し上げます。

「高等教育と女性」

—その社会的還元シリーズ②—

高野フミさん

一九七四年の東京、京都における I F U W 第十八回総会では、準備委員長として会議を成功に導かれ、今回の横浜での総会でも、特別顧問として活躍された高野フミ先生にお話を伺った。



二十一年前の総会と今回を比べて

「二十一年前は、まだ女性の国際会議が日本では珍しい時代で、比較的寄付も集めやすく、世界各国から八百人もの出席者があった。今回は様々な大変な事情があり、前回に比べ苦勞が多かったと思う。しかし、会は大成功であった。皇后陛下のスピーチは真心のこもったものであり、感銘を受けたという外国のメンバーが多かった。また、前回と今回と両方出席した人も多くあり、会員出演の『日本の夕べ』などは、伝統文化を

鑑賞した前回とはずいぶん違い、日本の会も変わったという感想が寄せられた。青木恰子会長も二十一年前は通訳だったりなど、前回手伝い役だった人が今回は中心的立場で活躍し、時の流れをつくづく感じました」

会の創立以来、その発展に尽力された先生にとって、日本での二回の総会は、それぞれに感慨深いことと拝察した。

大学婦人協会との関わり

「J A U W には一九四六年創立の年から副会長として携わり、後に I F U W の副会長を二期務めたあと、一九八〇年に会長に就任した。会長選挙の時は、対立候補もなく、周りから推されて引き受けた。いろいろな国のメンバーからなっているこのような会は、それぞれの国柄がある。自己主張の強い国、権力指向の強い国、そんな中で副会長時代に周囲を氣遣って全体を大事に纏めたことが推薦された理由ではないか。また、会長を退任する時、財務理事のイギリス人から『三年経つてようやく分かったことだが、あなたの W E L L は結局 N O ね』と指摘された。 Y E S ・ N O を最初からはっきり表示する国民性と、『W E L L』と一呼吸おいてから、柔らかに否定する国民性

の違いに気付かされ面白かった」

国民性というより、先生の他者を大切に思われる人柄の表れたエピソードとして興味深く感じるとともに、教育者としてのみではなく、津田塾会の理事長をはじめ様々な場でご活躍の、先生のリーダーとしての大きな力を、期せずして伺い知ることができた思いがした。また、 Y E S ・ N O をはっきり表示欧米的な態度は、当人たちにとっても案外窮屈なことも知れないと感じた。

「大学婦人協会も、また国によって様々で、アメリカなどは、会員数も非常に多く、大統領からも一目置かれてい存在である。日本は一見女性力が持ってきたように見えるが、まだまだ社会的には後進国であり、 J A U W の存在意義はこれからも発揮されるであろう。今後の課題は、若い人にとって魅力のある会にし、若いメンバーを増やすことである。とかく大学生くらいの女性は、男女の格差などには無頓着でこのような会にも興味を示さない。我々が女性の生き方の手本を示すことも大事ではないか」

I F U W のみでなく、六十年近くも女子教育に尽くしてこられた先生にとっては、後に続く女性への思い

もひとしおと感じられた。輝く先輩に恵まれた我々も、個人的な日々の生活の安きに流れず、女性全体をいつも視野に入れて考えることの大切さを痛感させられた。

女子教育者として

津田塾の卒業生は、「高野先生は怖かった」という。お会いしてその理由が分かった。先生は一九五三年にアメリカ大学婦人協会の奨学金を受け、一年間ハーバードのラドクリフ・カレッジに留学された。大体学生は一日十五時間は勉強するのが普通であったという。学問の厳しさを体験された先生にとっては、教え子のいう「怖さ」は、先生の教育に対する情熱そのものであり、またそれは先生に巡り会えた弟子たちの誇りであり、恩師への賛辞であろう。

女子大学の歴史そのもののような先生の人生において、共学指向の強まる今、女子大学の存在意義について深慮しておられるご様子であった。

インタビューを終えて

先生は大正三年のお生まれとか。つやつやとしたお肌、穏やかだが打ては響くようなお話ぶり、今なお様々な方面でご活躍と聞く。

先生、どうかいつまでもお元気で私たちの「ランブ」でいてください。

東京支部新入会員

(1996年1月現在)

氏名	出身校	住所	氏名	出身校	住所
丸山 壽子	日 女		森 裕 子	実	
西村 ジャネット	ウエルズ (英国)		緒方 璋	東 芸	
小野寺千鶴子	明 学		因幡正代	東 医	
奥 坊 光子	津・院		小田きく子	昭 女	
川 瀬 美保子	聖・院		赤 間 邦子	茶	
田 中 節子	日 女		小野園子	昭 女	
中山正子	日 女		宮本なほ子	東	
畑 尻 麻紀子	聖 大				
畑 時 玲子	放送大				
豊 島 玲子	津				
武 内 道子	日 女				
佐々木月子	青 学				
深沢佐知子	青 音				
山下 靖子	武 津				
林 芳 子	女 院				
池田美紀子	東 女				
熊 谷 美恵子	日 実				
下 川 良子	大 女				
若 井 良子	大 女				

国外奨学生を囲む会

一月十三日、住友クラブにおいて S・サレーさん(エジプト)とF・パスカルさん(ベルギー)の研究報告会を催した。サレーさんは日本女性史を興味深く話され、パスカルさんは難しい電子工学の世界を何とか聴衆に理解させようと努力された。実り多い成果を挙げられた事を、喜びたい。

神戸支部より震災手記届く

「阪神大震災と神戸支部」は、会員四十四人の手記集です。事務所に置いてあります。お読み下さい。

行事報告・予定

- 7月5日 バスツアー(財務主催)
- 8月18日 第25回 I F U W 国際会議
- 8月25日 於横浜国際平和会議場
- 9月20日 見学「国連アジア極東犯罪防止研究所」
- 9月27日 見学「東海村原子力施設」
- 10月18日 寛永寺拝観とお話(第二回)
- 11月18日 講師 浦井正明氏
- 12月9日 観劇 演舞場(財務主催)
- 12月16日 国立能楽堂 公演鑑賞
- 1月13日 国内奨学金贈呈式
- 1月20日 (国内奨学委、社会福祉委と共催)
- 2月14日 国外奨学生を囲む会
- 1月20日 新春のつどい(本部主催)
- 2月14日 講演「北京世界女性会議について」(神奈川支部と共催)
- 3月1日 講師 有馬真喜子氏
- 3月1日 「ともしび」第19号発行
- 4月20日 講師 房野 桂氏
- 5月15日 講師 豊住マルシア氏

報告

恒例の年末寄付を、留学生相談室及びさわやか福祉推進センターに持参した。

一九九五年度の留学生は三十カ国約五千人。中国、韓国、台湾の三カ国が圧倒的に多く、近年ロシアからも資格を取りたいと留学生がふえているとか。パブルがはじけたため、マンション、アパートの空室がふえ、留学生の住宅事情が好転しているとのこと。

さわやか福祉センターは一九九五年度より財団となった。日本の福祉のかかえる一番の問題は、高齢化していく身障者のこと、そして、公的に市や区が福祉に力を入れるだけでなく、地域の住民の福祉活動を活性化しなくてはならない。また、災害時のボランティア活動をスムーズにするため、団体名を登録し、バッジ、腕章等を付けて、災害地域に速やかに入場出来るようにというご意見は一考に値すると思う。(柴崎富子)

編集後記



雨不足の東京地方で、沈丁花、梅の香も例年より遅い気がする。自然の営みに心を寄せつつ、社会の動きも、しっかり見つけていきたい。(K)

ともしび 十九号 発行日 一九九六年三月一日

発行 大学婦人協会東京支部

〒160 新宿区新宿七十七-18 戸山マンション二四一号

ともしび編集係 Tel 〇三三三二〇二一〇五七二 印刷 タナカ印刷機